

## 《登壇者のみなさまより》

### 世界政治研究会30年を振り返って

石田憲（千葉大学）

1993年12月11日(土)に始まった世界政治研究会は、その名称自体が「国際政治」に対抗する意図かと問われがちだが、世界の政治であれば何でも構わないという程度の意味に過ぎなかった。直接対象とする領域も政治学、政治史などに限定していた訳ではなく、むしろ専門分野外の人たちにも自らの研究の面白さを伝えるというシンプルな方向性に基づいていた。関西圏の院生・教員たちと連絡をとって、当時の大阪市立大学が所有していた梅田第三ビルのサテライトで研究会を立ち上げた。以下の記述は、30周年記念の会で語った内容そのものではなく、本稿の内容も含め記憶違いなどがあるかも知れない。一見継続的な方針に見える部分も、試行錯誤から徐々に変化していった点が多く、仮に私が引退した場合でも、今後の運営を拘束するものではないことを付言しておきたい。

発足時にはZoomなどもなく、対面での接点しかなかったため、関西と関東の結びつきが少なく、論文などでは接していた研究者同士の知己を得る機会となるよう、関東における研究者を招く試みもした。当初、必ずしもメンバー数は多くなく、報告者探しも難航した。また、せっかく報告者を頼んでも出席者が少ないという事態もあり、関東に移って1997年10月11日(土)の回からコメンテーターを設けて、少しでも出席者を増やす努力も続けていった。コメンテーターは報告者が見つけてくるという方式に移行して、新しいメンバー拡充へ結びついただけでなく、コメントをしてくれたのを機に報告をお願いする可能性にもつながった。現在は幸い700名以上の案内送付者に至り、ネットでの同時開催も含め、比較的参加者は安定してきている。

ただ、報告者探しには時間とエネルギーが必要で、ある時期から自分の場合、学会出席は報告者リクルートに費やされ、学会報告の時間枠内だけでは収まらない内容と思われたら、1時間報告、2時間質疑という形式で呼びかけを続けていった。その際、留意したのは院生やポスト・グラデュエートの人たちでも、自分が公刊したばかりの著作内容をそのまま語るのではなく、書けなかった点やこれから発展させていきたいと思う内容も含めるようお願いしてきた。なお、公刊された本の単なる書評は出来るだけ避けるようにした。というのは、ある本については書評がされたのに、類似したテーマの別の本を取り上げない訳にもいかず、書評の会になっていく可能性を懸念したからである。

完成された報告が要求される学会報告などと異なり、まだ煮詰めていなくても、これからテーマにしていく、内容を深めていくといった、チャレンジングな報告が中心となれば、というのが当初の狙いであった。実際、長時間の質疑を通して、研究対象の幅、深度を拡大する機会になったとの指摘も存在した。さらに、書評をやらないのと同主旨で、例えば「世界政治研究会編」により執筆者を募って論文集を刊行する試みは避けてきた。当然、例会が報告者と編集者の接点となり、出版の方向へ向かうのは喜ばしいことであるが、研究会の名前を冠して上梓企画を立て始めると、執筆者として声をかけられた人と、そうでなかった人たちの間で格差が生じてしまう危険性を感じていたためである。

同様な理由から、研究会として科学研究費や外部資金を応募することも、これまでは行なってい

なかった。あくまで手弁当で、遠い赴任地・滞在地から出てきてもらっても、研究会として旅費・滞在費を支給することはなかった。ただ、研究者を育てるという感覚はなく、あくまで面白い研究が正当に評価される機会となれば、というのが発足時からの目指していた方向性であった。それは自分の研究を読んで理解してくれる読者層が生き残っていった欲しいという切なる願いから来ていたのかも知れない。加えて、編集者やメディア関係者などの研究者とは違う視点から見てくれる人たちにも声をかけ続け、研究者との架け橋になってもらえたらという期待も含まれていた。

最近の傾向として、めでたく研究論文が刊行され、評価を受けて就職も果たすと、現在の大学状況が過酷なため、研究会への参加が困難となってきた。世界政治研究会との縁が薄れても、研究そのものが続けられれば構わないのだが、残念なことに大学をめぐる環境は、そうした余裕を失ってきている。結果として、この研究会でも一期一会的な出会いに終わってしまうパターンが増え、かつての報告者がテレビでの解説者として登場して突然消息を知ることもあり、学会を含め再会する機会なく、そのままになってしまっているケースも珍しくない。

報告者の依頼に関しても、最近では学会のように日常と少し切り離され、研究マインドになっている場だと頼みやすく、いきなりメールなどで依頼しても多忙を理由に断られがちとなる。また、海外調査中に遭遇した研究者の場合が研究への意欲が高まっている状態でもあり、そのハイテンション中に報告依頼をするのが最も引き受けてもらえる確率が高いように思われる。そもそも海外で文書館において日本人研究者を見かける頻度が以前に比べ減ってきているのも、昨今の趨勢が反映されている。それでも、内外で知り合った新しい研究者が、かつての報告者や参加者が指導する大学院生である偶然も見られ、確実に後継者が育ってきたと実感出来る。ただ、発足当初お互い「先生」の呼称はやめて対等な立場で議論しようと試みた企図も、これだけメンバー間の年齢差が大きくなると、それを強制するのは逆にパターンリズムへ陥る感があり、最近は単なる「さん」づけへの固執を控えている。

以上、自分は怠惰で教育的配慮も乏しいため、出来るだけ省エネで可能な範囲のことを愚直に続けてきた結果が30年の歩みに過ぎない。このやり方が唯一でないのは無論のこと、他の意欲的な研究会も各個に存在する。記念の会でも、後進に道を譲るべきという話が出ていたように、いつまでもロートルが牛耳っているのは、あるべき姿ではないかも知れない。是非我こそは、という有志が登場して頂ければ、引き継ぎを果たしたいところだが、続けていくだけでも昨今の大学状況ではなかなか難しいだけに、しばらくは相変わらず欺し欺しやっていく気がしている。少なくとも自分より若くて面白い研究をしている人たちは幸い健在なので、その発掘に貢献できれば多少の研究会の存在意義はあるだろう。最後になったが、これまで研究会を支えてくれた方々、今回機会を与えて下さった芝崎厚士さんへ心より感謝の意を表したい。